

# 協定校への留学 留学報告 2016

 愛知県立芸術大学

## 目次

ロンドン芸術大学(イギリス) 秋良美有さん	1
ケルン音楽大学 (ドイツ) 加藤志摩さん	7
ハンブルク音楽大学(ドイツ)① 加藤菜月さん	15
ハンブルク音楽大学(ドイツ)② 川合亜実さん	33
リスト音楽院(ハンガリー) 加藤麻里さん	39

# ロンドン芸術大学(イギリス) 留学報告 Vol.1

美術学部 油画専攻 秋良美有さん

## カリキュラムについて

ロンドン芸術大学セントラルセントマーチンズ校(CSM)への交換留学生は全員 Stage2の学年と同じカリキュラムを行います。3 か月間の留学生もいれば、1年間いる方もいて、たくさんの生徒が入れ違いで行き来しているようです。

カリキュラムの大きな流れとして、自分が割り振られた Pathway(専攻)のスタジオにて個人制作を行います。(Pathway は事前に CSM に提出したポートフォリオの作品内容にて割り振られます。)そして、半年間の場合、交換留学期間中に Unit2つ分参加します。1つはチュートリアル。1人の先生と定期的に自分の作品について話あう Unit。もうひとつは、Stage 2の学年全員が7つのセミナーより1つ選び、Pathwayが入り交じったメンバーに分かれ、セミナーのお題について学期末にグループ展示をする Unit です。この7つのセミナーはロンドンにある CSM ならではのお題で、とても興味深いものばかりです。人気なものだと、パフォーマンスアートやフェミニズムについて議論し身体について考えるセミナー、マルクス、フロイト、フーコーなどの哲学者や批評家などの言葉を通して現代の社会とアートについて考えるセミナー、また技術や言語を用いて美学をかんがえるものがあります。私は“BLACK THOUGHT”という今年度はじめてセミナーに加わった、第三世界のアートについてのセミナーに参加します。

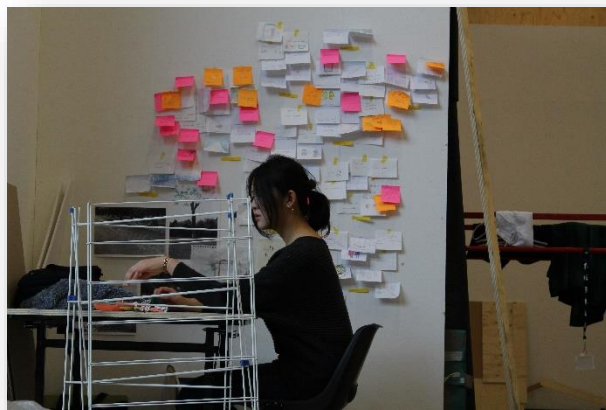


## ロンドンで気づいたこと

CSM では世界各国からきた生徒たちと、いろんな視点から今のアート界について語り合います。私の周りは Black, Queer, Feminism, racism という単語をよく耳にするほど、特に人種、階級、ジェンダーに関することに興味がある学生が多いように思えます。また、Guerrilla girls の展示や Shades of Noir の講演会など学校外でも関連した企画に触れる機会があります。日本からイギリスにきてから、日常生活で様々な人種の方々と出逢う機会が増えました。これによって、幸いなことに、弱い自我に気づきました。私にとって生まれた土地、性別等は作品を通して私から強く主張したい個性ではないと思っています。しかしその反面、他に私がもつものが見当たりませんでした。学校がはじまった最初のころは、周りの問題意識の多さを知り自分の制作が不安定になりました。ですが、チュートリアル先生や同じ学年の生徒たちと評論することで今は大分落ち着いて自分の制作について考える時を過ごすことができます。

愛知県からロンドンに学生として移り住み、今まで“あった”ものと、今”ありつづける”ものと、今”ない”もの、そして新しく”ある”ものを日々実感しています。加えて、リチャード・セラやジェフ・クーンズなど大物アーティストの個展や、バンクシーの今だから見ることのできる消されかけのグラフィティ、毎日のように予定されている各地のギャラリーのオープニングなど観るものがたくさんあり忙しく刺激的な日々です。

最後に、なにより交換留学の機会をいただけたことに感謝しています。そして、私のことを気にかけてくれている周りの人々の存在がとてもありがたいです。残りの約4か月の留学期間をよりみりのりの多い研究となるよう努力し続けていきます。



## ロンドン芸術大学(イギリス) 留学報告 Vol.2

### 課題以外の講座について

おおまかに課題以外のサポートとして、技術力向上のためのツール講座と語学力向上のための講義があります。

ツール講座では、一回きりの講座が多く、ワークショップの成り立て方、卒業制作展にむけて搬入の仕方・展示方法、パフォーマンス・映像作品などについて教授が入れ替わりで講義をしてくださります。特に私は、今話題となっていること(最近の展示や BBC で取り上げられた情報について)をお題としてとりあげた講義やドキュメントとはいったい何なのか、という話し合いをした講義が今でも振り返って考えるほど身になりました。その日その場にいる生徒同士がディスカッションをして互いの知識を交換し合い、止揚していける場がとてもありがたいです。普段の授業でも、生徒は受け身ではなく自主的に発言をしたり、隣の席の人とお題について話し合い結論をだすということが行われています。クリティカルシンキングを交わす場を求めていた私は、今実際に体験して自分の研究の未熟さや他人の意見からの新しい視点を発見することができて、改めて学ぶことの楽しさを実感しています。

語学のレクチャーは自主的に参加する授業です。毎週校内で行われる”Language Development”は、主に母国語が英語でない新入生を対象とした授業ですが誰でも参加できます。こちらでは各専攻の授業に沿ってステートメントやエッセイの書き方を学生同士が助け合い学ぶことができます。また、”Language Centre”という施設では CSM だけでなくロンドン芸術大学全体で語学のサポートをしてくれます。チュートリアル、ドロップイン、休み期間の集中特訓、アカデミックライティングがあり、自主的に予約をして授業に参加したり、1対1でエッセイやプレゼンテーションについて相談できます。私はチェルシー校で週に一回のアカデミックライティングの講座に参加しました。IELTS のためにアカデミックライティングを日本で学んできましたが、この講座で学んだことは IELTS 受験者向けではなく、学生の論文向けであったので新鮮でした。



その他にも、定期的に行われるスタディサポート(学校内の施設の説明やチュートリアルへの参加の仕方などのサポート)、ワークショップ(自分の制作によって各々が自主的に学びにいける特別なスペース)、月曜レクチャー(毎週月曜日、ファインアート関係のゲストからお話をきけるレクチャー)など、こまめに学校内でなにが行われているかをチェックしていると充実した学生生活が過ごせます。ワークショップの部屋は木工、鉄鋼、鋳造、映像、撮影等目的によって分けられていて各部屋に担当の技術者がいます。私も初めて石膏鋳造に挑戦しましたが1対1で丁寧に教えていただきました。

### オープンスタジオについて

先日の週末にオープンスタジオにて展示をさせていただきました。普段は ID カードを持っている者しか学校のゲートもアトリエにも入れないというセキュリティが厳しい CSM 校ですが、オープンスタジオでは、イベント参加登録さえすれば気軽に校内に入ることができます。各々の親御さんやフラットメイト、他校の学生が観に来てくだり、賑やかな雰囲気でした。

CSM 校の同期の学生は愛知県立芸術大学の学生よりも映像作品やパフォーマンス作品が多いように思えます。この傾向は、パソコンやビデオカメラ、プロジェクター、照明器具などプロ仕様の機器の貸し出し施設が構内にあることと、アトリエではなく家などで使い慣れているパソコンやケータイを使って制作できる環境があることが理由に含まれると考えています。

交換留学期間の約半分を過ごし終えた最近、負担だと思っていたことが“悔しい”という気持ちに変わったことに気が付きました。ですが、この兆しは自分の可能性につながる事なので有り難く噛み締めています。クリスマスへの装飾で光り輝いている街中とは裏腹に、期末に提出するエッセイやアセスメントへの準備に日々切磋琢磨していますが、他人の影響で新しい気づきができるこの状態を大切に過ごしたいです。



## ロンドン芸術大学(イギリス) 留学報告 Vol.3

### グループ展示

交換留学期間の最後の校内課題は、昨年に6回の講義を共に受けたメンバーとその講義についての作品をつくり共同展示をすることです。3日間の搬入、1日間の展示・講評、1日間の搬出という日程で行われました。専攻や特技の異なるメンバーとの話し合いは想像以上に難しく面白みのあるものでした。私が受けていた講義は“BLACK THOUGHT IN THE POLITICS OF ART”の内容で、日本からロンドンへ来た私にとって、他者から自己をみつめなおすよい刺激となりました。実際に私のグループには、タイ、ナイジェリア、インド生まれの生徒、イギリス、アメリカ生まれの生徒、また両親が他国生まれでイギリス生まれの生徒など、さまざまな“人種”の生徒がいました。その中に日本生まれの生徒として私も加わっていました。“人種”差別にもなりうる繊細な話題が、生徒間で続きました。ですが、このメンバー内は、同じ講義を受けたことにより“人種”の意味を共有しながら話し合えることができ、むしろ自分のマイノリティからの意見を言うことが必須となるようなオープンマインドになれる安心できる雰囲気でした。この共同展示を通して、自己の立場、学校の課題を通して他の生徒と関わる意義、そして他人を理解しようとする行動の仕方を身をもって感じました。展示を終えることにより、つい昨日まで話あっていたメンバーと集まることがなくなるのが既に寂しく思います。しかし、たとえ私が日本に帰ろうとも、よくもわるくも現代はメールや Facebook、Skype 等で繋がるのが容易いので、一度繋がった関係が続ける努力をするつもりです。そうすることで、答え無き人間問題に規模を広げてより深く関わっていき、芸術に携わる者として表現することを生涯行いたいと思っています。



## 愛知県立芸術大学からCSM校への留学について

留学はひとによって得るものが変わる、つまり、その時その場所で選んだ行動によって出会える生身の人々・話題によって得るものが異なるので100人交換留学生がいれば100人の交換留学の価値があるということになります。もちろん、交換留学をしなくとも、価値のある日々は存在します。ただ、日本では出会えないひと、話されないお題、感じることのない五感が交換留学先にあるのは間違いないです。それを求めるかどうかは自分の希望次第であり、必ずしも留学が生徒の価値向上につながるとはいきれません。そして芸大生として他国の芸大へ交換留学をすることは語学留学とは異なり、言語を学びにいくのではなく、日本語ではない言語を使って芸術を学ぶこととなります。「私はこれからロンドンに留学します！」「え？英語話せるの？」というような会話がよく留学前に行われましたが、正直この問いは毎度私を不安にさせました。しかし実際には、言いたいこと、伝えたいことがあれば、周りの友達や先生は少ない単語でも意志があれば察してくれますし、なにより、学校内では自分の作品や研究が伝えたい内容をフォローしてくれました。0からはじまるコミュニティ、の中でやりたいことを模索することは簡単ではありませんが、自分の内側と外側を整理することができるよい機会となりました。

留学中に出会えた人々、かき集めた知識、身を投げ入れた経験は留学期間でとどめることなく自分の中で永遠に求め続けていきます。そして、自分から他者へ偏りなく発信していく最善の方法を考え、実行していきます。





# ケルン音楽大学(ドイツ) 留学報告 Vol.1

音楽研究科博士前期課程 弦楽器領域 加藤志摩さん

ケルンにやって来て二か月程となり、町の雰囲気にもすっかり慣れました。最近是比较的暖かい日が続いていますが、陽は3時頃から沈み始めて5時にはかなり暗いです。私はWGといって1フロアを2人で住む学生のアパートに住んでいます。しかし、まだ空き部屋の住人はおらず、今のところ一人で暮らしています。家具が付いていない部屋だったので、机や椅子、ベットも先輩と友人に手伝って貰って作りました。自分で家具を組み立てるという感覚は全くなかったのが、大変でしたが新鮮でした。

また、10月の中頃から語学学校にも行き始めました。日本でも勉強していたので文法など知識として知っている事はありましたが、実際話そうとすると感覚として言葉が出てこず、A1クラスの途中から通うことにしました。しかし、A1だからといって簡単な訳ではなく知らない事やよく理解していなかったことも納得しながら進めています。語学学校のクラスメイトは、韓国、ドミニカ共和国、ブラジル、シリア、チュニジア、アゼルバイジャンなど様々な国の生徒がいます。日本のように黙って授業を聴くというスタンスではなく、皆積極的に発言していて、最初はあまりの勢いに驚きました。分からない事、間違える事は恥ではなく、堂々と質問して問題を後まわしにしない姿勢は見習うべきだと思います。毎日朝の9時から12時15分まで授業なので、ハードではありますが、少しずつドイツ語が聞き取れるようになってきました。また、単語や文を話すことによって覚えられるので、今は自分の語彙力が増えていくのを感じられて学んでいて楽しいです。ですが、ネイティブが普通に話すスピードはとても早くまだまだ全然理解できませんし、門下生との会話も自分の言いたい事の半分も言えませんが・・・。

私が通っているのはケルンから電車で1時間程のアーヘンという小さな町にあるケルン音大の分校です。電車の車窓からは広大なドイツの景色が見え、毎回小旅行のような気分になります。アーヘンには世界遺産である大聖堂があり、先日見に行きました。ケルンの大聖堂のように大きくはありませんが、西陽に写る壁一面のステンドグラスがとても幻想的で綺麗でした。また今はドームの前にある広場でクリスマスマーケットの準備がされています。アーヘンのクリスマスマーケットは有名だそうで、学校帰りに寄るのが楽しみです。

レッスンは、ハンス・クリスティアン・シュヴァイカー先生に教えて頂いています。10月の初めから今までほとんどスケールと基礎のレッスンです。スケールのレッスンといっても音程などの練習ではなく、自分の体をリラックスさせるテクニックを学んでいます。感覚的な事なので時間がかかり、なかなか一筋縄ではいきませんが次第に自分の音に変化が出てきていると実感しています。また先生はとても優しく丁寧に接して下さい、理解していない場合は例え話も交えて分かるまで何度も教えて下さいます。また、先生のクラスでは週に1回 Klassenvorspiel といって試演会があります。他のクラスメイトの演奏を聴くことは、とても刺激になりやる気の源となっています。レッスンの半分くらいは説明なので英語でないと理解するのが難しいですが、次回からはゆっくりのドイツ語でレッスンをお願いしました。練習室に関しては、ケルンの本校では何日か前から予約しても練習室が取れないことも多く、大変だと聞いています。ですが、アーヘンではいつもその日に行っても練習室は空いていて何時間でも使えるので助かっています。その上、私は自分の家でも練習できるので、練習室に関しては困ったことはありません。



また、こちらではとてもマイペースに事が進みます。ビザの申請に必要な賃貸契約書をいつまでたっても大家さんから貰えず、しつこくしつこく言い続け、ようやく11月の中旬に契約してくれました。日本のように1度言ったらやってくれる事は少なく(もちろん、きちんとやって下さる方もいますが)、普通に忘れられるので、目上の方に何度も催促しては迷惑ではないかという感覚はここでは無くした方がいいなと感じました。

またケルンでは多くの演奏会があり、先日もブロムシュテットとウィーンフィルの演奏会に行きました。開演の1時間半前に販売される当日券で10€(!)で聴くことができ、ブロムシュテットが目の前にいる事や、もちろん演奏もとても感動しました。こちらにいる間、練習やレッスンの他にもできるだけ多くの演奏会や美術館を訪れたり、旅行したりしようと思っています。

## ケルン音楽大学(ドイツ) 留学報告 Vol.2

年が明けて 1 ヶ月過ぎました。今回は主に 12 月にした事やドイツでのクリスマスについて報告したいと思います。12 月の初めにはこちらに来たら絶対に行こうと考えていたライプツィヒに行きました。ライプツィヒはケルンのような元気な街ではなく、落ち着いた学術都市といった印象を受けました。そこで聖トーマス教会やバッハ博物館を見学し、聖トーマス教会ではバッハとメンデルスゾーンが描かれているステンドグラスが西日に照らされてとても綺麗で、ここにバッハが居たんだと思うと涙がでてきました。毎週土曜日にはカンタータの演奏をしているそうなのですが、日曜日に行ったので聴くことができず残念でした。6 月にはバッハ音楽祭があるそうなので、また訪れたいと思います。

私は初めて海外の年末を体験したのですが、特にクリスマスはドイツに限らず、欧米諸国の人達にとって本当に大切なものなんだと感じました。日本では宗教的というよりは恋人同士のイベントのような雰囲気ですが、ドイツでは家族と過ごす時間をとても大切にしています。私も何人かの友達にクリスマスは日本に帰るのでしょうか？と聞かれて、ドイツにいるつもりだと答えるととても驚かれました。クリスマスマーケットも大きな駅(ケルンでしたらケルン中央駅)の近くに1つだけ催されるのかと思っていました。ですが、大きさは様々とはいえほとんどの地区の広場に開かれていました。



マーケットではキャンドルライトやクリスマスツリーの装飾品といったクリスマスに必要な物から鮭を炙って作ったサンドイッチや、木で作られたまな板などの日用雑貨まで幅広い商品が並んでおり、見ているだけでもとても楽しかったです。また、マーケットではグリュウワインといってワインを温かくしてシナモンの香りがする飲み物が売っていて、友達とそれを飲みながら見て回りました。ただ、このワインは甘い割にアルコール度数が強いので注意が必要です。(私は一度も全部飲みきれませんでした。) 12月25日には全てのお店が閉まり、通りに出ている人も少なく、まるで日本のお正月のような雰囲気でした。私は2つのパーティに呼んで頂いて、とても楽しい時間を過ごす事が出来ました。



大晦日には、ライン川から上がる花火を見に行く予定にしていたのですが、辞めて家でゆっくりしていました。夜の10時30分頃から近所で爆竹や花火の音が鳴り始め、日付が変わる頃になると戦場かと思うほど爆発音や花火の閃光が物凄かったです。日本のようにしんみりとした雰囲気はまるで無く、とても驚きました。元日にはケルンから電車で30分程のデュッセルドルフという町に初詣に行きました。デュッセルドルフには日本領事館があり、街中の殆どの看板に日本語表記がしてあるので少し日本に帰った気分になりました。日本の食材などもケルンより安く売っているようなので、また買い物に来ようと思います。

早いもので今学期のレッスンもあと1回となりました。自分に足りないものや必要なテクニックの基礎を多く学べたので次の学期にはそれを発展させて自分の音楽に取り入れて行こうと思います。

## ケルン音楽大学(ドイツ) 留学報告 Vol.3

夏ゼメスターが始まってもうすぐ二か月になろうとしています。最初は先ゼメスターと同じように午前中に語学学校に通い、それからアーヘンへレッスンを受けに行くというスタイルにしたかったのですが、語学学校に丁度良いコースがなく、断念しました。ですが、その分時間に余裕ができたのでじっくりと楽器と向き合えたと思います。ドイツに戻ってすぐに Ostern といってキリストの復活祭がありました。日本人にはどうも馴染みのないお祭りですが、ドイツの人達にはクリスマス同様にとっても大切な祝日で殆どのお店が閉まります。ウサギ型やたまご型のチョコレートが家族同士でプレゼントし合うそうで、スーパーにも贈り物用のチョコレートが沢山売られていました。また、この日にお墓参りもするそうで、お盆のような日なのかなと感じました。私はヒツジ型のケーキを頂きました。形が形なのでどこから食べようか迷いましたが、とても美味しく頂きました。ドイツの春はとても綺麗で、日本ではそんなに春を意識していなかったのですが、秋からこちらに来たからか一斉に咲き出す花が美しく、ドイツの人々が春を心待ちにしている訳が分かった気がしました。

4 月中頃からレッスンも始まりました。冬ゼメのレッスンでは、殆どスケールシステムという新しいテクニックをこなすのに必死でした。今ゼメに入ると、先生は引き続き基礎練習や、新しいテクニックを教えて下さったりしましたが、本格的な曲のレッスンになりました。本当に一音一音のレッスンで、体に力が入って楽器に圧力をかけたり、少しでも気を抜いた音があると、すぐに指摘されました。よく練習して臨んだつもりのレッスンでも「全然音がきれいじゃない」と言われ、どうしてそう言われたのか分からずに悩んだこともありました。ですが、自分も先生も納得した音が出た時は褒めて下さり、ずっと先生が仰っていた「いい音」が少しずつ分かってきた事が実感できて嬉しかったです。



また、こちらで初めて Klassen Abend(門下のコンサート)に出演しました。アーヘンの学校のホールは一つしかなく、ケルン本校のホールよりも小さいですが、とても心地いい響きのホールです。お客さんは殆どがお年寄りの方で、学生が一生懸命演奏をしているのを楽しみに聴きにきて下さっているのが舞台の上からでも感じる事ができました。私も緊張するよりも楽しんで演奏したのは久しぶりで、弾き終わった後の拍手が本当にあたたかく心に染み渡りました。また頑張ろう、と思える演奏会でした。



5 月には、ゴールデンウィークに家族が旅行にきました。ドイツにいる間に一度は訪れたかったノイシュヴァンシュタイン城を観光したり、ケルンは勿論、ケルンから電車で 10 分程のブリュールという町に行き、アウグストゥスブルク城を見てまわったりしました。アウグストゥスブルク城は世界遺産なのですが、意外と知られておらず観光客が少なかったので、美しいお城をじっくり見学することが出来ました。

また、同じ学年の加藤菜月さんの留学先のハンブルクにも行きました。初めて北ドイツを訪れたのですが、緑色の屋根に赤い煉瓦造りの建物が印象的な港町でした。ハンブルクが発祥の大きなハンバーガーを食べ、すべて手作業で作った巨大なジオラマがあるミニチュア博物館を見学しました。また、その日の夜にはバレエの「ナポリ」という作品を見ました。踊りが素晴らしかったのは勿論なのですが、舞台のセットやダンサーの衣装の色合いも全体で構成されていてとても美しかったです。次の日はブラムス博物館やハンブルク私立美術館をまわりました。パウル・クレーの「金色の魚」など名画揃いで、館内も広く見応えたっぷりでした。今回は滞在時間が少なかったため改めてもう一度訪れたいと思います。

早いものでドイツでの生活もあと少しになってきました。レッスンや演奏会、旅行なども楽しみたいと思います。

## ケルン音楽大学(ドイツ) 留学報告 Vol.4

予定していた授業も終わり、夏休みがやってきました。今回は6月後半からの1ヶ月の出来事を書こうと思います。今年はなんだか夏らしくなく、1番暑くても34度が1日2日続くだけで殆ど27,8度、最低気温は13度などという事もあり、とても涼しいです。とはいえ、気温が上がる時は湿度も伴いますので蒸し暑いですが、私にとっては過ごしやすい夏で助かっています。

6月の下旬には2回目の Klassenabend(門下のコンサート)があり、私はまた出演させて頂きました。シュヴァイカー先生の門下では Klassenabend は全員参加ではなく、出たかったら出るシステムです。門下生は14人程いるのですが、その内の4人しか出演せず驚きました。私は6分程の短い曲を弾いたのですが、前回同様、目の前に座っているおばあさんや他のお客さんが笑顔で拍手を下さいました。前回と同じ会場で演奏したのですが、今回はフレーズ感が長くとれて余計な力も入らなかったからか先生からも「前回よりも成長したね!」と言って頂き、とても嬉しかったです。

7月の初めに最後のレッスンがあり、先生からこれから何に気をつけて演奏して行ったらいいのかを改めて教えて頂きました。最初はどんな教え方をされる先生なのかも知らずについたので、とても不安でしたが、素晴らしいお人柄と分かりやすいレッスンで確実に変化が実感出来ました。また来年お会い出来るのがとても楽しみなのと同時に、気を引き締めて演奏していこうと思いました。

また、6月の後半から前通っていた語学学校に通い始めました。毎日朝から3時間、毎日新しい文法、毎日知らない単語が山のように出てきて大変だと思う事もありますが、やっと最近同居人や、ドイツ人の友達が話している内容がはっきり聞き取れてきている事に気付きました。語学学校にもう一度通って良かったと思っています。コースは8月までなので、もう少し頑張りたいです。

6月に中頃に留学前から行きたかったライプツィヒのバッハ音楽祭にハンブルグに留学中の加藤菜月さんと行きました。着いた日の夜には聖トーマス教会でカンタータのコンサートを聴きました。その日に演奏していたカンタータはたまたま私も弾いたことがある曲で懐かしさを感じながら、大きなホールとは違った聖トーマス教会のまろやかな響きの中で素晴らしい一時を過ごしました。また合唱はトーマス教会少年合唱団で透き通るような歌声に聴き惚れてしまいました。

次の日には聖トーマス教会に次いで有名な聖ニコライ教会でもカンタータを聴きました。こちらはピリオド楽器を用いて演奏しており、通奏低音がとても歯切れよかったのが印象に残りました。どちらの演奏会も私達の席はあまりいい位置ではなかったので演奏者が殆ど見られず、それだけが心残りでしたがずっと行きたかった音楽祭に行けていい思い出になりました。



その日の内にライプツィヒから少し足を延ばしてドレスデンにも行きました。ドレスデンではツヴィンガー宮殿を散策したり、第2次世界大戦で全壊してしまい、2005年に再建された聖母教会などを観光して回りました。

ドイツは本当に美しい街が多いです。日本に帰国するまであと僅かですが、色々な街を訪れたいと思います。



# ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.1

音楽研究科博士前期課程 管楽器領域 加藤菜月さん

4 月からドイツ ハンブルク音楽大学にて勉強させていただいております、大学院音楽研究科音楽専攻管楽器領域 2 年の加藤菜月です。先生方をはじめ沢山の方々にお力添えをいただき、応援してくれる家族や友人がいたからこそこのチャンスを手にすることができました。この機会を与えていただけたことに感謝し、留学生活をしっかりと頑張っていきたいと思っています。

ハンブルクで生活し始めて早 3 ヶ月が経ちました。3 月中旬と少し早めにドイツへ来たことが幸いし、渡独後 2 週間ほどで住民登録、銀行開設、ビザ申請と重要な手続きを全て終え、4 月からの新学期を落ち着いて迎えることができました。今では暮らしにも慣れ、日々を楽しく送っています。私は、ハンブルクの大学に通う学生のための寮に住んでいます。学生寮はいくつも存在しますが、私の住む寮は 20 分程バスに乗れば街の中心地へ行くことができる便利な場所に立地し、さらに 24 時間使用できる防音の練習室が多数備え付けられています。そのためハンブルク音楽大学の学生が多く住んでいますが、音大生専用の寮というわけではなく、ハンブルク大学など一般の大学へ通う学生も住んでいます。

アルスター湖のすぐ近くにあるハンブルク音楽大学の美しい校舎は、残念ながら現在工事中のため、学生は皆別のキャンパスで勉強しています。私の通うキャンパスは以前別の大学が使用していた校舎のようで、本来とは全く別の場所にあり、30 分程バスに乗って通っています。私は、ハンス＝ウド・ハインツマン先生に御指導いただいています。憧れの先生のレッスンを毎週受けることができ、とても幸せに感じています。レッスンでは、その日御指導いただきたい作品とオーケストラスタディを主に見ていただいています。演奏時の姿勢や楽器の構え方、音の出し方など基礎的な奏法の改善にも取り組んでおり、作品を通してそういった点も御指導いただいています。先生とはドイツ語でお話し、レッスンもドイツ語で受講しています。先生のおっしゃることをその場で全て理解することはまだ難しいので、レッスンは必ず録音し、家に帰ってから辞書を片手に聞き返し復習しています。また、他の学生のレッスンも積極的に聴講しています。これはドイツに来る前からやろうと決めていたことでした。同じ場所で学ぶ学生の演奏やそれに対する先生の御指導を聞くことは、自分の受講するレッスンと同様に大変充実した時間だと感じています。

ドイツ語にはとても苦労しています。語学学校には4月から通い始めましたが、知らない言語を知らない言語で学ぶ難しさを痛感しました。日本で勉強していた内容よりも簡単なレベルのクラスへ入ったにも関わらず、通い始めた当初は先生の言われることやリスニングの問題がほとんど何も聞き取れませんでした。それがたとえ間違った文法でも積極的に発言したり質問したりしているクラスメイトとは対照的な、何か言いたくても言葉にならず小さくなることしかできない自分を情けなく感じ、日々落ち込みました。しかし、ドイツ語に少しずつ慣れていくと同時に、「周りの人と同じようにドイツ語で話したい」「相手の話を理解して自分の考えを伝えたい」という気持ちが強くなり、今では前向きな気持ちでドイツ語の勉強に取り組めるようになりました。自分で勉強し文法を理解することも大切ですが、それ以上に自らドイツ語を声に出して話すことや相手の話を聞くことが大切だと感じます。時間はかかると思いますが、絶対に話せるようになるんだという強い意志を持って、焦らずコツコツ頑張っていきたいと思います。

ハンブルクにはオペラハウスと大きなコンサートホールがあり、オペラ、バレエ、オーケストラと素晴らしい演奏会が日々行われていて、毎週のように足を運んでいます。オペラやバレエは事前に席を予約して聴きに行っていますが、オーケストラの演奏会では大体当日券を買うために少し早めにホールへ行き、定価の半額でチケットを購入して聴いています。日本と大きく違うなと感じることは、お客さんが皆公演前や休憩中のワインやお喋りを欠かさないことです。休憩中はホールが空っぽになってしまうほど誰も客席に残っていないので、初めはとても驚きました。お客さんは、その時間も含め、その日の公演を楽しんでいるように感じます。

音楽を聞くことと同じ位に、こちらの空気や景色を感じることも大切にしています。天気の良い日はハンブルクの街をのんびり散歩したり、週末は列車に乗って別の街へお出掛けしたりもしています。ドイツはその街によって雰囲気や全く違い、大変興味深いです。こちらにいる間に、ドイツ国内は出来るだけ多くの都市を、また隣国へも足をのばし様々な場所へ旅をしたいと考えています。



## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.2

5月末に参加したマスターコースについて報告致します。

ベルリンの北に位置する都市 ラインスベルクの音楽アカデミーにて開講された、現在御指導を賜るハインツマン先生が講師を務められるマスターコースへ参加しました。若い音楽家のために国が設置したこのアカデミーには、練習室やホールだけでなく宿泊施設も併設されており、一年を通して沢山のマスターコースが開講されています。ハインツマン先生のマスターコースも毎年この時期に開講され、今回はハンブルク音楽大学の先生のクラスに在籍する学生をはじめとする14名が参加しました。日中はレッスンが開講され、私も数回受講しました。加えて何度か行われた試演会には全員が参加し、一人ずつソロを演奏して皆で聴き合いました。聴き合った後はそのまま解散せず、誰の演奏に対してどのように感じたか、良かった点も改善した方がより良くなる点も学生同士で伝え合う時間が設けられました。自分の感じたことを内に秘めたまま「よかった。」「勉強になった。」というような漠然とした感想を述べて終わってしまうのではなく、それぞれが自分の意見を具体的にはっきりと伝えていることに感心しました。最終日の午後にはホールでコンサートが催され、皆1曲ずつ演奏しました。奏者もお客さんもコンサートを楽しんでいて、とても素敵な時間でした。私にとってはこれがドイツで迎えた初めての本番でしたが、良い緊張感の中で楽しく自分らしく演奏することができました。それをお客さんが笑顔で聞いてくださり、さらに幸せな気持ちになりました。



ハインツマン先生は、「他人と比べて自分の演奏はどうだと比較する必要はありません。今は勉強している最中で、それぞれが取り組むべき課題を持っていて、それをクリアすることが重要です。しかし、舞台上で演奏する際にはそれすらも必要ありません。コンサートで大切なことは、お客さんが演奏を楽しんでくれること、そして自分も演奏を楽しむことです。」とおっしゃいました。ドイツへ来て、同じクラスの皆のレベルの高さに圧倒され、私もはやく皆のようによく吹けるようにならなければと必死になっていました。その中で、「音楽を楽しむ」という大切な気持ちも、つい忘れてしまっていたように思います。日頃の練習では目の前にある自分の課題へ真摯に取り組み、しかし舞台では自分が演奏家であることを忘れずに、気持ちを新たにフルートや音楽と向き合っていきたいです。



ラインスベルクには 1 週間滞在しました。空き時間は、練習したり他の人が受講するレッスンを聴講するだけでなく、散歩をしたり、ケーキを食べにカフェへ行ったりもしました。夜になると皆でお酒を飲みながらお喋りをして、楽しく過ごしました。この 1 週間で、それまであまり話す機会がなかったクラスの皆と沢山話し、仲良くなることができました。また、マスターコースの初日、ドイツ語が突然クリアに聞こえるようになりました。今までは相手がどんな単語を言っているのかもわからないことが殆どでしたが、ある時不意に相手の話す言葉が明瞭に聞こえ、それが頭の中に文字化して浮かぶようになりました。それは、これまでの人生で一度も経験したことのない、不思議な体験でした。

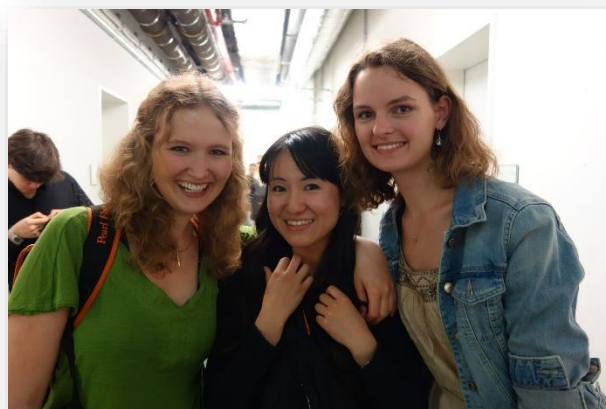
## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.3

6月上旬、ワイマール・フランツ・リスト音楽大学との短期海外プログラムに参加しました。このプログラムは、愛知県立芸術大学と交流協定を結ぶフランツ・リスト音楽大学の学生を中心に編成された吹奏楽団がドイツ各地で演奏会を行うもので、日本からは本学の管楽器コースの学生 11 名が来独して参加し、私も愛知県立芸術大学の学生として参加させていただきました。中国、ハンガリーの音楽大学で学ぶ学生も複数人参加しており、公演はドイツ全音楽大学学長会議 演奏会、ワイマール城 野外演奏会、ヴァルトブルグ城 演奏会、エアフルト歌劇場 演奏会と計 4 回行われました。吹奏楽は、日本では決して珍しいものではなく、ひょっとしたら「クラシックよりも吹奏楽のほうが身近に感じられる」と思われる方のほうが多いかもしれません。小学校や中学校の吹奏楽部に入部したことをきっかけに楽器と出会い音楽の道を歩み始める管楽器奏者は少なくありませんし、ほとんどの音楽大学の管打楽器専攻では吹奏楽の授業が開講されています。しかし、ドイツではそうではありません。ハンブルク音楽大学では吹奏楽の授業は開講されていませんし、これまでハンブルクで数ヶ月暮らした中で、コンサートホールで吹奏楽の公演が行われるという情報を耳にしたことはありません。吹奏楽に対してそれ程日本と認識の差がある場所で、吹奏楽に初めて取り組む他国の音大生たちと一緒に演奏することは、私にとって刺激的な体験でした。



ワイマールはドイツの中央に位置する街で、ハンブルクからは列車で 5 時間半程かかります。ハンブルクに比べて少し暖かな気候で、またこの頃のドイツは夜 10 時でも薄明るい程に随分と日が長くなっていたので、過ごしやすい毎日を送ることができました。

そんな場所ですぐ数ヶ月前まで一緒に勉強していた管楽器コースの皆と再会し、とても懐かしい気持ちになりました。ドイツでの暮らしの中では、自分が伝えたいことを正確に言葉にできずもどかしく感じたり、相手の話すことが理解できず悔しい気持ちになることもしばしばですが、ワイマールに滞在している間はほとんど日本語を話していたので、相手と意思疎通をしながら自由に話せる嬉しさを久しぶりに感じました。同時に「これがドイツ語でもできるようになったらな。」という気持ちも強くなったので、今後もドイツ語の勉強に一層励みたいと思います。



また、昨年交換留学制度を利用し本学へ留学していたトロンボーン部のヨハネスくんが、私たちに会うためにワイマールへ来てくれました。オフの日に皆で列車に乗って遊びに行ったライプツィヒでは、愛知県立芸術大学を卒業し現在ライプツィヒ音楽演劇大学にて学ばれている先輩にお会いし、大学内を案内していただきました。愛知でもない、その上日本でもないこの土地で本学を通じて知り合えた方にお会いできたことは、一層嬉しく感じられました。



## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.4

今回は、ハンブルクで通っている語学学校について報告致します。

私は、アルスター湖のすぐ側にあるコロンという語学学校に通っています。ハンブルクで知り合った多くの方がこの語学学校を勧めてくださり、体験教室を経て、私もここへ通うことにしました。

コロンの授業にはさまざまな時間形態があり、自分の生活スタイルに合わせて好きなコースを選ぶことができます。ハンブルクに来て半月程経った4月の初めよりこの語学学校へ通い始めましたが、その頃はまだ大学のレッスンがどのように進んでいくのかははっきりとわかっていなかったことと、ドイツでの生活に慣れながら無理のないペースで通いたいと考え、まずは月曜から金曜までの週5日間、午前中の1時間半のコースに2ヶ月間通いました。そしてその後は、もう少し長い時間勉強するコースに通っています。

現在参加しているクラスは、平日朝8時50分から13時まで、途中休憩を挟みながらも1日約4時間ドイツ語を勉強できる集中的なコースです。このクラスに2ヶ月間参加すると、GER(外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠)に基づく評価レベルを1段階終えることができます。授業は主に教科書を使って進んでいきますが、授業の前半は文法、後半は会話を中心に学ぶ構成になっていて、1回の授業でドイツ語のあらゆる面をしっかりと学習できます。加えて宿題も出るので、家での勉強も欠かせません。

朝早くからお昼過ぎまでドイツ語を勉強し続けるのは体力的にも楽ではありませんし、1回の授業で沢山の内容を勉強するため欠席すると授業についていけなくなると思います。ですが、特に今は日常でよく使う文や単語ばかりを習っていることもあり、日常生活において自分が言いたいことを正しく伝えられたり、相手の言うことを理解できる場面が少しずつ増えてきました。日に日にドイツ語が話せるようになっていくことを実感でき、嬉しいです。

また、今のクラスに参加し始めてから、クラスメイトと仲良くなることができました。初めに参加していた 1 時間半のコースには休憩時間がなかったので、授業が始まる少し前に集合し、終わればすぐ解散、授業中以外でクラスメイトと話す機会はありませんでした。しかし、今のクラスでは休憩時間があるので、その間にわからない部分を教え合ったり、今日習った文法で会話の練習をしたり、最近の出来事を報告し合ったり、皆で必ず話をしています。授業が終わった後も、皆で図書館へ行ったり、時々ランチへ出掛けたりもします。私は、この時間は授業と同じ位有意義だと感じています。当然誰もがまだ不自由なくドイツ語を話せるわけではありませんが、話したいという気持ちは強く持っており、一生懸命自分の意思を伝えようとします。皆と一緒に話していて、この意識がとても大切なのだと改めて感じました。理解を共有できた時にはいつも以上に喜ばしく思いますし、授業で習った内容よりも皆との会話に出てきた文や単語の方がずっと頭に残ります。一緒にドイツ語の力が付いていくのでクラスの団結力も深まり、ドイツ語の勉強は益々楽しいと感じるようになりました。もっと皆と話したい気持ちを胸に、音楽やフルーツだけでなくドイツ語の勉強にもしっかり励んでいきたいと思っています。





## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.5

9月上旬はまだ夏らしさを残す日もありましたが、日に日に秋が深まっていくことを感じながら生活していました。10月に入ると急に寒くなり、今では日中でも8度程までしか気温が上がらなくなりました。そして驚いたことに、朝は7時を過ぎてもまだ真っ暗です。目覚める頃には強い太陽の光を浴び、22時を過ぎてもまだ薄明るかった夏が随分と前のことのように感じますが、今後気温はさらに下がり、日照時間も今以上に短くなるようです。愛知で生まれ育った私は、1日わずか数時間しか太陽が昇らない日々や、湖の水面が厚い氷で覆われてしまうような厳しい寒さの伴う冬を経験したことがなく、当初は不安を感じていました。しかし、それらもこの地で生活しているからこそ経験できることなのだと考え、前向きな気持ちで本格的な冬の到来を迎えたいと思っています。



大変光栄なことに冬学期もハンブルクで勉強させていただけることとなり、今月からまた大学へ通っています。留学期間は元々満期1年間を希望していましたが、渡独時は半期分の在学許可のみをいただいていた。冬学期もここで勉強するためには、まず御指導くださるハインツマン先生にそれを承諾していただき、その後ハンブルク音楽大学のオフィスの方にも同様に承知していただく必要がありました。それらをクリアするために早い時期から準備をするべきだと考え、5月には先生へ自分の意思をお伝えしていました。7月中旬に冬学期も在学できることを正式に認めていただき、安心して夏の休暇を迎えられました。その後行ったビザの延長申請も、問題なくスムーズに終わることが出来て良かったです。

レッスンは夏学期同様、週に 1 度、1 時間受講しています。夏学期は主にロマン派や近現代の作曲家の作品に取り組んでいましたが、冬学期はまず初めにヘンデルやテレマンなどバロック時代の作曲家の作品へ取り組むことになりました。夏学期に引き続き、他の学生が受講するレッスンも毎週聴講しています。先生のおっしゃることをすぐに理解できる機会が増えてきたことで、レッスンが益々充実した時間と感じられるようになりました。気付けばハンブルクへ来て早 7 ヶ月半が経ち、留學生活の半分以上の日々を終えてしまいました。ここで勉強できる時間には限りがあることを意識しながら、1 日 1 日を大切に過ごすよう心がけています。



オペラ、バレエ、オーケストラのシーズンも本学的に始まりました。年が明けると、長い年月をかけて建設された新しいコンサートホール エルプフィルハーモニーがいよいよオープンします。オープン後には、このホールを本拠地とする北ドイツ放送エルプフィルハーモニー管弦楽団 NDR Elbphilharmonie Orchester(北ドイツ放送交響楽団 NDR Sinfonieorchester Hamburg の改名称)をはじめ、素晴らしい演奏家やオーケストラのコンサートが沢山予定されています。残りの留學生活でより多くの演奏や音楽に触れ、それらを存分に楽しみたいと思います。



## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.6

11月に入ってすぐのある晴れた日の朝、玄関を出るとつんと冷たく澄んだ空気が広がっており、ついに冬が来たのだなと感じました。その数日後には初雪を迎え、寒さは急激に厳しくなりました。どんよりとした気候に刺さるように痛い寒さが加わったことで、外出することを億劫に感じ、気分も憂鬱になりやすくなります。ですが、向上心を忘れず、前向きな気持ちで毎日をしっかりと過ごしていきたいと思います。

先日、語学学校の授業で自分の国の文化について意見を交わす機会がありました。その際、ある生徒が私へ「日本の人は麺を食べる時にどうして音を立てるの?」と質問してきました。欧州では、食事の際に音を立てることはマナー違反です。ですが、日本のうどん屋さんやラーメン屋さんでは当たり前のように麺を啜る音が響き渡っており、それが相応しくない行いであるとは考えられていないと思います。音を立てて麺を食べることが特別美しい振る舞いであるとは思いますが、そのことについてこれまで深く考えたことはありませんでした。

暮らし始めて初めて知った、日本では行われていないことがドイツでは当たり前のように行われていること(またはその逆のこと)は様々あります。例えば、日本中の何処にでもあり人々の生活を大いに助けているコンビニエンスストアは、ドイツにはありません。終日営業するお店がほとんど存在しないどころか、日曜は大抵のお店が営業していません。そのような生活に不便を感じてはいないものの、渡独当初は日本とあまりに違うため驚きました。他にも、雨が降っていても皆あまり傘を差さないことや、スーパーのレジにいる店員さんは決まって座って働いていること、電車やバスで誰も寝ていないこと、子供が制服を着ていないこと、重たい荷物を持っていたり体の不自由な人がいたら誰もがすぐに助けてあげることなど、生活の中には驚きが沢山溢れていました。

一番良いと感じるドイツの習慣は、お店を出入りする際にお客さんと店員さんが挨拶を交わすことです。日本では「いらっしゃいませ。」「ありがとうございました。」といった店員さんからお客さんへ向けての声掛けが一般的なように感じますが、ドイツでは互いに挨拶をします。慣れていない頃は毎度ドキドキしながら挨拶していましたが、自然にできるようになった今は気持ちの良い、素敵な習慣だなと感じます。

ドイツで暮らし始めたことで、言葉づかい、食べ物、他人との接し方など日本特有の文化や習慣についても意識するようになりました。特に日本語がアルファベットを使う言語とは大きく異なる文法を持っていることだけでなく、その数や種類、言い回しの多さに改めて驚き、自分が日本人であるにも関わらず正しい日本語を使えていないことにも気付かされました。

こういった文化や習慣の違いは、生まれ育った地を離れ全く異なる場所に暮らすことで初めて気付いたり実感するものなのだと感じました。この地で暮らす上で、ドイツが日本とは異なるそれらを持っていることを理解し受け入れ、少しずつ慣れていくことは重要なことだと思います。そして、それらは音楽にも影響すると思います。作品に取り組む際、作曲家がどんな人物だったか、どんな人生を歩んだか、なぜそれが作曲されたのかを知るに留まらず、その作曲家の故郷の文化や習慣、言語へ興味を広げることで、その曲や音楽性への理解をより深められると考えます。日本では想像するしかできなかったことを実際に経験したり体感したりすることができている今、音楽に限らず様々なことへ貪欲に興味を持ち、より多くのことを吸収したいと思います。



## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.7

秋学期が始まり、再び日々の生活リズムを取り戻し始めた 10 月上旬のことです。街を歩いていると、デパートのショーウィンドウにクリスマスツリーやサンタクロースの人形が飾られている様子を目にしました。まだハロウィンすら迎えていないのに！とあまりの準備の早さに驚きましたが、当日に合わせて短期間だけハロウィン用に模様替えするのかな、ドイツのハロウィンはどんな様子になるのかな、と楽しみに待つことにしました。しかし、変化のないまま時間だけが過ぎ、ハロウィンなど最初から存在しないかのような静けさと共に当日を迎え、何事もなく 1 日を終えました。仮装に身を包んだ若者が渋谷のセンター街に溢れ返ったりする日本とは違い、ドイツではハロウィンをイベントとして特に大きく取り上げたりはしないようです。その話題を耳にすることも、ほとんどありませんでした。

11 月に入ると、玄関の扉に掛けられた可愛らしいリースやキラキラと光るイルミネーションが続々と登場し、街は瞬く間にクリスマス一色になりました。そして 11 月 21 日、ついにクリスマスマーケットが始まりました。ハンブルクの人々は、この時をずっと待ち侘びていたのだと思います。始まった途端、マーケットはいつも大賑わいです。ハンブルクでは、10ヶ所以上の広場や通りでクリスマスマーケットが開催されています。名物である熱々のグリューワイン、チーズやソーセージ、カラフルなお菓子、ほくほくのパン、砂糖がかかったドーナツ、色とりどりの蝋燭、クリスマスを彩る飾りやくるみ割り人形など、マーケットでは様々なものを売る小さなお店が隙間なく並びます。他には、レストラン、ライブやゴスペルを行うステージ、スケート場、氷の滑り台、遊園地にあるようなアトラクションが設置されているところもありました。アトラクションは、その多くが小さな子どもを対象にしているにも関わらず、どれもおよそ目を疑うほど高速で動いています。日本では考えられない程のスピードでぐるぐると回っている観覧車を見た時には、下から眺めているだけでもひどく恐ろしい気持ちになってしまいました。



ベルリンやシュベリーンといった別の都市のマーケットへも遊びに行きましたが、それぞれの場所に特徴や良さがあり、どこでも楽しい時間を過ごすことが出来ました。グリューワインが注がれるマグカップは、その年、そのマーケット限定のものが各所で用意されているようで、飲み終わると家に持って帰ることもできます。私は気に入ったデザインのものを見つけると決まって持ち帰り、部屋の隅に一つずつ並べて飾りました。これから先、集めたマグカップを手にとってはこのクリスマスマーケットの様子を何度でも思い出し、その度に私は幸せな気持ちになれることでしょう。

季節は完全に冬となり、中でもとりわけ厳しい寒さを伴う時期を迎えようとしています。年が明ける頃には残る留学生活が 100 日を切ってしまう、少しずつこの地を去る支度を始めなくてはなりません。限りある時間を一層大切に感じながら、日々を元気に過ごしていきたいと思います。

## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.8

1月11日、ハンブルクに新しいコンサートホールがオープンしました。名前はエルプフィルハーモニー Elbphilharmonie、ハンブルクの新しいシンボルです。当初は何年も前に完成を予定していたそうですが、度々延期され、ようやくオープンを迎えることができました。遠くからでもすぐに見つけられるような特徴的な外見をしているのに対し、中はシンプルでモダンなデザインが施されています。外壁の大部分は透明で、建物の中から外へ目を向けると、美しいハンブルクの街や港を一望することができます。

こけら落としの公演は、このホールをホームとする北ドイツ放送エルプフィルハーモニー管弦楽団 NDR Elbphilharmonie Orchester (北ドイツ放送交響楽団 NDR Sinfonieorchester Hamburg の改名称)が行いました。後日観た映像には、演奏終了と同時に総立ちする笑顔いっぱいのお客さんと大喝采が巻き起こるホールの様子が映し出されていました。素晴らしいコンサートだったのだと思います。私はその公演のチケットを手にする事が出来なかったため、その日はヴェルディのオテロというオペラを観るためにオペラハウスへ行きました。斬新な演出で観客を終始ハラハラさせる面白い公演でしたが、普段では考えられない程に空席が目立つ劇場内の様子に驚き、そちらの方が印象に残ってしまいました。同じ時間、ハンブルクの音楽好きは、皆当然エルプフィルハーモニーへ行っていたのでしょう。



私は、オープン4日目に公演されたシカゴ交響楽団のコンサートの際に初めてエルプフィルハーモニーを訪れました。当日券売り場のカウンターの前にできた長蛇の列の内、前から11番目に並んでいた私は無事にチケットを販売してもらうことが出来ました。私が購入すると「本日のチケットは完売致しました。」というアナウンスが伝えられ、後ろで待っていた多くの人々が公演を聴くことなく帰って行きました。幸運なことに、私は最後の1枚を販売していただけたのでした。

真新しいピカピカのホールで聴く、これまでCDでしか聴いたことのなかったシカゴ交響楽団の演奏はとてもダイナミックで、私は最後の音までずっとワクワクしていました。コンサートのメインプログラムとして演奏されたラヴェルの展覧会の絵の冒頭部分では、トランペットの音色があまりに柔らかで、上から降り注ぐ音が私を包み込んでくれるような感覚を覚えました。

今月はシカゴ交響楽団の他に、北ドイツ放送エルプフィルハーモニー管弦楽団のコンサート、内田光子さんのピアノリサイタル、ヨーヨー・マさんのチェロリサイタルも聴きに行きました。シーズンプログラムが発表された時から楽しみにしているチェチーリア・バルトリさんのコンサートをはじめ、エルプフィルハーモニーでは世界で活躍する一流音楽家のコンサートが今後も沢山予定されています。相変わらず寒さの厳しい毎日が続いていますが、積極的にホールへ足を運び、コンサートを存分に楽しみたいと思います。





## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告①Vol.9

2月中旬、ハインツマン先生クラスの学期末コンサートがありました。この時期は多くのクラスが同様のコンサートを開催しています。コンサートは一般の方々にも公開され、当日は満席になる程多くのお客さんが来ていただきました。

私は、シャルル・ケクランが作曲した『フルートとピアノのためのソナタ 作品52』を演奏しました。自分が表現したい曲の世界を少しでもお客さんに伝えられるような演奏をして、それを一緒に楽しみたい一心で吹きました。この曲を通してクリアすべき課題はいくつもあり、どれも私にとって難題でしたが、演奏中はそれらを気にしないようにしました。なぜなら、コンサートとは会場にいる全ての人と共に音楽を楽しむものだからです。演奏が終わると、笑顔いっぱいのお客さんが沢山の拍手をしてくれました。反省点や今後の課題はあるけれど、自分の演奏でお客さんと楽しい時間を共有することができて、凄く嬉しかったです。

今学期は、同じクラスの学生のレッスンを受ける機会もありました。ハンブルク音楽大学には楽器の指導の様子を審査される試験もあるそうで、私はその試験と試験のためのレッスンの際に生徒役をやりました。レッスンをしてくれたのは、現在大学院の修士課程に在籍する私と同じ歳の学生です。私は彼女をととても尊敬していて、日頃のレッスンもよく聴講させてもらっていました。レッスンでは、先生や私とは異なる視点から新しい提案をしてくれたり、それを一緒に試したりもしました。試験のためのお手伝いをする立場であっても自分にとって貴重な時間だと感じていましたし、指導者としての彼女の姿にも大いに刺激を受けました。

ハンブルクでの留学生活も、残り僅かとなってしまいました。この地で過ごした日々は、私にとってかけがえのないものとなりました。1年間指導して下さったハインツマン先生は、音楽、楽器、作品、奏法、どんなことでも丁寧に教えてくださり、優しく、厳しく、私を導いてくださいました。レッスンを受ける度に私は音楽をもっと好きになり、フルートをもっと好きになりました。先生と出会い、指導していただけたことを誇りに思います。先生がおっしゃった「コンサートで大切なことは、お客さんが演奏を楽しんでくれること、そして自分も演奏を楽しむことです。」というお言葉をはじめ、学んだこと、教えていただいたこと、この1年間のことをこれから先もずっと忘れないでいきたいです。

ハンブルク音楽大学へ留学することが出来て、本当に幸せです。留学の実現に力を貸して下さった方々、ハンブルクでお世話になった方々、日本から応援して下さった方々、全ての皆様へ心から感謝しています。その気持ちを胸に、この留学の成果を今後の自分の演奏で発揮していきたいです。



## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告②Vol.1

音楽研究科博士前期課程 鍵盤楽器領域 川合亜実さん

3月15日にハンブルクへ到着し、3ヶ月が経ちました。ようやくこちらでの生活にも慣れ、たくさんの方々に助けをいただきながら、日々過ごしています。ハンブルクはとても生活しやすい街で、都会でありながら自然にも溢れています。今回の留学報告では基本的な情報について、ご報告させていただきたいと思います。

### 〈住民登録・ビザについて〉

留学生の最初の心配事のひとつに住民登録・ビザ申請があると思います。住民登録はドイツに到着後1週間以内、ビザ申請は90日以内に行います。留学している都市によって必要な書類が異なったり、同じ場所でも担当者によって言うことが違ったりします。かなり苦労することが多いらしく、留学している友達からもいろいろな大変だったという話を聞いていました。私もかなり心配をしていたのですが、運が良かったのか、私の場合は何も問題が起らずとてもスムーズに申請・取得できました。担当者の方もとても親切丁寧な方でした。現地の方の話によると『もしもなにか指摘された場合にはすぐに諦めて後日また別の人に担当してもらおうといい』とのことでした。担当者によって言うことが様々で、また、担当者のその日の気分によっても変わることもあるからだそうです。ビザは申請後2～3週間で発行されました。家にビザができたことを知らせる手紙が届くので、その手紙を持参して受け取りに行きました。私の場合のビザ申請時の必要書類は、

- ・ビザ申請書    ・パスポート    ・写真    ・入学許可書    ・住民票
- ・ドイツで有効な健康保険の加入証明書    ・賃貸契約書
- ・経費負担証明書（事前に日本の領事事務所で作成します）

でしたが、そのほかにもあった方が良かったかも・・・と思った書類は、念のため全て持っていました。



### 〈語学学校について〉

私は、4月の初めから3ヶ月間、語学学校に通っています。週5日で1日4時間のコースで勉強しています。毎日朝の 8:50~13:00 までです。今は A2の終わりをやっています、授業はとても楽しく、雰囲気も良いです。良い先生方と意欲的なクラスメイトに恵まれました。分からない箇所はその都度質問でき、理解するまで先生が熱心に説明して下さるので、分からないままにせずクリアしていくことができます。また、様々な国から集まったクラスメイト達とお互いの国について話すことで、他の国に対しこれまで以上に関心を持つようになりました。

### 〈住居について〉

私は学生寮ではなく、一般のお宅の空いているお部屋をお借りして住んでいます。日本語とドイツ語のバイリンガルの大家さんです。私の住んでいる2階は2LDK なのでもう1人留学生が入居していて、彼女とキッチン・バス・トイレを共同で使用しています。彼女は6年ほどドイツに住んでいる音大生で、いろいろ助けて頂いたり教えて頂いたり、とても親切にしてもらっています。また、バス停や駅も近くにあるため、電車に乗れば大学と語学学校まで乗り換えなしで行くことができます。

### 〈大学について〉

ハンブルク音楽大学の練習室は Rübenkamp 駅のすぐそばにあります。別の場所にある本来の校舎が現在工事中のため、今はこちらの校舎でレッスンや授業を行っているようです。練習室は待ち番号をもらい、自分の順番が来ると鍵がもらえるシステムです。曜日によって異なりますが週の半ばはかなり混むので4時間程待たなくてはならない日もあります。今の私は、語学学校のあとで学校へ行っているので、練習できるのが 17 時頃からです。休日は比較的空いているため、朝から夜まで続けて練習することが可能です。



### 〈レッスンについて〉

ナットケンパー先生のレッスンは平均して月に4~5回程度あります。レッスンは毎週ではなく、2週間に1度、週2回のレッスンがあります。1時間半~2時間のレッスン時間です。この2週間のサイクルは、練習を十分にしてからレッスンを受けられるので、私にはとても合っています。レッスンはドイツ語で行われますが、分からない単語は先生が辞書をひいてくださいます。先生はとても優しく熱心にレッスンをしてくださり、毎回のレッスンでは本当に勉強になる時間を過ごしています。先日は主校舎にあるホールで門下生のコンサートがあり、私は30分ほど演奏させて頂きました。一般の方々も聴きにいらっしやっていて、演奏後には、とても綺麗だった、とても良かったよとお客様から声を掛けて頂きました。他の学生の演奏を聴くことでも刺激を受け、良い勉強となっています。



### 〈交通について〉

ハンブルク市内の主な交通手段としては、S-Bahn(市電)、U-Bahn(地下鉄)、バスがあります。至る所にバス停があり、どこへ行くにも便利な街です。私の使っている1ヶ月定期券は月78ユーロで、バス・S-Bahn・U-Bahnが全て乗られるのでとても助かっています。私の定期券の指定範囲では、市内のほとんどの場所に行くことができます。



ここは、“ライスハレ”というコンサートホールです。この日は『SWR バーデンバーデン & フライブルク交響楽団』の演奏で、ヴァレーズのアメリカや、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲を聴きました。とても良い座席で、9ユーロで聴くことができました。ハンブルクはバレエも有名なので、バレエを観に行ったりもしています。



ハンブルクの天気は変わりやすく、気温が上がったかと思えば翌日には10度ほど下がったりします。雨も降ったり止んだり、不安定な天気が多いです。6月の今週の気温は20度前後です。この写真を撮った日はとても晴れた休日で、ドイツの人々はアルスター湖を眺めながら会話を楽しみ、アイスを食べたり、ビールを飲んだりして休日を過ごしていました。

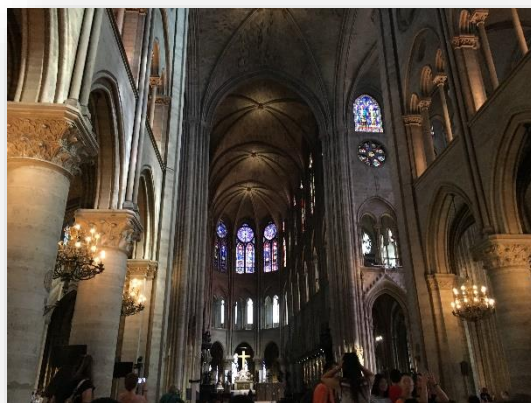
## ハンブルク音楽大学(ドイツ) 留学報告②Vol.2

夏休みを利用して、ライプツィヒ、ベルリン、ウィーン、パリを観光してきました。しかし、この時期は劇場やオーケストラが休暇に入っているため、コンサートやオペラを鑑賞することが出来ず、その点が少し残念でした。次回は是非シーズン中に訪れたいと思います。



### ライプツィヒの聖トーマス教会

J.S.バッハが音楽監督を務めていたライプツィヒにある教会で、教会の付属学校の音楽教師もしていたことで有名です。バッハのお墓もここにあります。いつも本や教科書でしか見たことがなかったので、その空気を肌で感じる事が出来て嬉しく、不思議な気持ちになりました。教会の隣にはバッハ博物館もあり、バッハに関連する資料が展示されていました。



### パリのノートルダム大聖堂

有名なバラ窓のステンドグラス。この地を中心として新たな多声音楽が発展されていったのだと考えると感慨深いものがありました。大聖堂内には、建物の建築過程を表したパネルや、宝物展示室もありました。



### サント・シャペル教会

ノートルダム大聖堂の近くにあるゴシック建築の教会。こちらの教会のステンドグラスはパリ最古と言われています。赤・青・緑・黄・紫の 5 色のみを使った壁一面のステンドグラスが美しく、巨大な万華鏡のようで感動的でした。ほとんど壁がなく天井を支えています、重すぎて落ちることの無いように、1 つの窓につき 100 枚以上のガラスで出来ているそうです。

その他にもベルリン大聖堂やブランデンブルク門、ウィーンのシェーンブルン宮殿、パリの凱旋門と、様々な歴史ある名所を巡りました。

クラシック音楽を演奏する上で、その楽曲の作られた時代・歴史を知ることとはとても重要なことの一つなのですが、過ぎた歴史を実際に経験することは今となっては不可能です。しかし、ヨーロッパの街には至る所に歴史を感じる建物が大切に残されていて、歴史上の場所へと足を運ぶことができます。作曲家が生きていた時代に、その歴史の中で生まれた作品の表現をより深めるためにも、実際に足を運びその雰囲気や空気を感じとることは大切だし価値のあることだと改めて痛感しました。今回の旅で見たもの感じたものを、自分自身の演奏表現に生かしていきたいと思います。

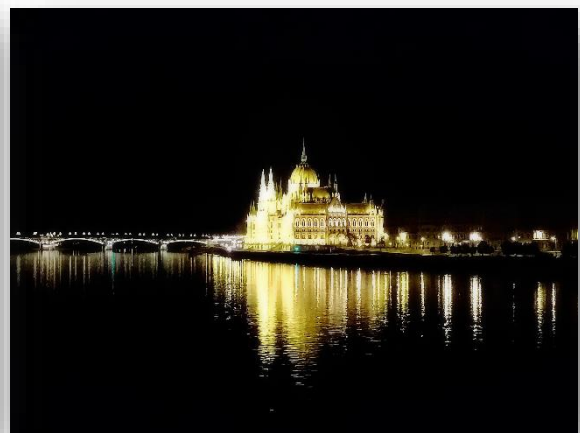


## リスト音楽院(ハンガリー) 留学報告

音楽研究科博士前期課程 鍵盤楽器領域 加藤麻里さん

8月26日にハンガリーへ入国し、リスト音楽院へパートタイムスチューデントとして入学致しました。8月29日からオリエンテーションがあり、入学式や、小さなワークショップ、学校ツアーなどがありました。私達パートタイムスチューデント(愛知県芸の研究生のようなプログラム)、正規入学生、そして大学院学生も同時にスタートするのでレッスンミーティングや様々な機会新しい友達を作りやすい環境です。様々な国から学生が来ており、学内は英語でコミュニケーションが取られています。レッスンでも先生が英語を話して下さいます。本年度は日本人の学生も例年より多く、たくさん仲間と共に新年度を迎えることができ心強いです。

キャンパスは2つあり、どちらもブダペスト中心部のオクトゴンから徒歩で数分の場所にあり、とても便利です。本館は歴史的で豪華な装飾に彩られた大ホールと小ホールを携え、一般の聴衆に向けコンサートも開かれています。先日はここで5年に一度あるリストコンペティションが行われ、大いに盛り上がりました。別館であるリゲティ館では授業や自習、練習室が充実しており、毎日朝は7時から、夜は23時までグランドピアノで練習することが出来ます。私のアパートがある西駅近くは住宅地で、家族団欒の静かな時間を大切にするハンガリーでは週末は音を出すことが出来ないためこのような環境は有り難いです。



さて、先日よりレッスンがはじまりました。私はイエネー・ヤンドー先生と、ファルヴァイ・カタリン先生お2人の先生のクラスに所属しています。レッスンでは先生が多くの例を演奏して下さるのでとてもわかりやすく、勉強になります。レッスン全体の大きなテーマは『音楽の方向性』です。旋律の歌い方だけでなく、進んでいく音楽を予測出来るような音色を選択し、腕や身体もそれを無駄なく助ける動きである必要がある…それが今の私の課題です。レッスンは様々な実験とディスカッションを経て進められ、それぞれの瞬間がヒントになります。リスト音楽院はフレーズ感を持った勢いのある演奏をする生徒が多く、練習室から漏れてくる音を聞いてもセクションごとの方向性や和声の進行を意識した練習をしているのがわかります。

ハンガリー人は温厚で優しい方が多く、街ではちょっとした瞬間にコミュニケーションがあり、心温まる瞬間が多くあります。公用語はマジャール語ですが、若い世代は英語を話すことが出来るようです。どのハンガリー人も、ハンガリー語で挨拶をするとても良くしてくれます。物価も通貨のフォリントが約0.37円ととても安く、生活費が日本ほどかからず住みやすいと感じています。街では交通機関が電車、バス、トラムと発達しており、どこへ行くにも便利です。

街に7つ程あるホールでは、毎日何かしらのコンサートが開催されています。先日はアルト・バストロンボーンのコペティションや、イタリアの聖チェチーリア管弦楽団のコンサートなどに行きました。これから現代音楽の祭典や、ルガンスキーなどたくさんのピアニストのコンサートがあり、ドナウ河沿いのバルトークホールが賑わっています。現代音楽作曲家のペンデレツキのオーケストラと合唱作品が生で聞けるなんて、とても楽しみです。国内外からの有名オーケストラやソリストのコンサートを気軽に聞くことが出来、しかもほとんどのコンサートでスタンディングの学生席(空いていれば席にいらしてもらえることも)が500フォリントで用意されており、学生達は並んでチケットを手に入れています。このような素晴らしい環境の中でヨーロッパの学生の感覚は研ぎ澄まされて行くのかなと感じました。

最近ハンガリーは10月の難民受け入れか否かの投票を前に水面下で揺れているようですが、普段は住みよい街です。周囲の状況に気を配り、安全に勉学に励みたいと思います。